**召天者記念礼拝　降誕前第8主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年11月5日**

**「ふるさと」**

**創世記31章1～3節**

 **31:1 ヤコブは、ラバンの息子たちが、「ヤコブは我々の父のものを全部奪ってしまった。父のものをごまかして、あの富を築き上げたのだ」と言っているのを耳にした。**

 **31:2 また、ラバンの態度を見ると、確かに以前とは変わっていた。**

 **31:3 主はヤコブに言われた。「あなたは、あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。わたしはあなたと共にいる。」**

**フィリピの信徒への手紙3章17～21節**

**3:17 兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。**

 **3:18 何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。**

 **3:19 彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。**

 **3:20 しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。**

 **3:21 キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。**

**本日、11月の第一主日は召天者記念礼拝です。私たち諏訪教会を通って神様の元に召された信仰の先達の在りし日のお姿を覚えて偲ぶ礼拝です。**

**皆さんのお手元に「2023年諏訪教会召天者記念礼拝」という過去10年に天に召された方々のお名前を記した名簿があると思います。私はこの4月に赴任したばかりですので、この名簿に記されている方々と直接お会いしたことはないと思いますが、諏訪教会に長く繋がっておられる方でしたら恐らく全員のお顔と在りし日のお姿が思い浮かんでこられると思います。いつも礼拝堂の前の方の席に座って熱心に礼拝を守っておられたとか、讃美歌を歌うのが大好きでいつも大きな声で讃美歌を歌っておられたとか、物静かだけと祈りの人で熱心に祈っておられる姿が印象に残っているとか、色々な思い出があるでしょう。**

**残念ながらこの地上ではもうお会いすることはできませんが、やがて私たちがこの地上での歩みを終えて神様の元に召された時に、神様の御元で再会することができるのです。その時にはいっぱい思い出話をして、一緒に神様を礼拝し、讃美をし、お祈りをしたいと思います。**

**召天者記念礼拝は、私たちの信仰の先達の在りし日の信仰の姿を思うと共に、その信仰が継承されていくことを祈り願う大切な礼拝です。先に神様の元に召された方々の信仰を今教会に連なる私たちに、また召された方々のご家族に信仰が受け継がれ、さらには後の世代に受け継がれていくことをこの礼拝を通して祈り願うのです。**

**諏訪教会は8月に教会創立113周年を迎えました。教会はその113年の歩みの中で実に多くの方に信仰が与えられ、イエス・キリストの十字架と復活の愛を宣べ伝え、愛の業を行ってきました。教会の歩みは神様の祝福の中で守られてきました。そして今この諏訪教会に連なる私たちも多くの恵みをいただいて歩んでいます。本日私たちは信仰の先達たちの信仰の姿を思うと共に、後の世代へと受け継がれていくことを祈り願って共に御言葉に耳を傾けたいと思います。**

 **この召天者記念礼拝に私たちに与えられました新約聖書のフィリピの信徒への手紙3：20節にはこのように書かれています。**

 **「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」**

**ここで「本国」と訳されている言葉は、以前使っていました口語訳聖書では「国籍」と訳されていました。「しかし、わたしたちの国籍は天にある」そちらのほうがなじみ深い方もおられるでしょう。さらには文語訳聖書の「我らの国籍は天に在り」この言葉の方が聞きなれている、ししっくりくる方もおられると思います。「我らの国籍は天に在り」大変力強い言葉です。私たちの国籍はこの地上ではなくて天に在るのだ。この地上での歩みはいわば仮住まいのようなものであって本当の国籍は天に在るのだ。だからこそ私たちはこの地上での歩みを終えたら本当の国籍のある天に帰るのだ。そのような力強い宣言の言葉です。**

**そのような私たちがやがて帰るところである「本国」「国籍」と訳されている言葉には「故郷」「ふるさと」という意味もあります。「我らのふるさと天に在り」です。天のふるさとに私たちはいつの日か帰るのです。**

**「ふるさと」と聞くと私たちは私たちのそれぞれが生まれ育った「ふるさと」を思い浮かべると思います。私には三重県名張市というふるさとがあります。ふるさとと聞くと、子供のころ近所の友達と遅くまで遊んだ原っぱや森、畑や田んぼといった風景を思い出します。今では新しい道や家ができて私の子どもの頃とは随分風景が変わってしまいましたが、山国ののどかな風景というのはいつまでも私の記憶の中で生き続けるでしょう。そういう風に、私たちは「ふるさと」にやはり特別な思いがあるものです。**

**そして私たちが「ふるさと」と聞くと思い浮かべるのが、童謡・唱歌の「ふるさと」だと思います。「兎追いしかの山　小鮒釣りしかの川　夢は今もめぐりて　忘れがたきふるさと」のこの歌の「ふるさと」です。この歌は恐らく日本人に最も愛されている歌だと思います。私たちのふるさとはぞれぞれ違いますのでその景色は違うのですが、それでもこれだけの人に愛される歌というのは日本人に共通の原風景を歌っているのではないかと思います。**

**この「ふるさと」を作詞したのは今の長野県中野市出身の高野辰之（たかのたつゆき）です。高野辰之は自分の幼いころの中野市の風景を思い浮かべて「ふるさと」を作詞をしたと言われています。**

**そして「ふるさと」の３番の歌詞はこうです。**

**「志を果たして　いつの日にか帰らん　山は青きふるさと　水は清きふるさと」**

**ふるさとを後にした人が立身出世をしていつの日にか自然豊かなふるさとに帰りたいな～という意味の歌詞です。立身出世をして、自分の夢や目標を果たしてふるさとに帰るというのはなかなか難しいことですが、できることなら故郷へ錦を飾る歩みをしたいと特に若い時は思うものです。**

**「ふるさと」の作詞をした人は高野辰之と申しましたが、作曲をした人は岡野貞一（おかのていいち）という人です。作詞者の高野辰之は違いますが、作曲者の岡野貞一はクリスチャンです。鳥取県生まれの岡野貞一は上京して東京音楽学校で音楽の指導に当たると共に東京の本郷中央教会で長くオルガニストとして奉仕をしました。そんな岡野貞一が作曲した唱歌「ふるさと」は讃美歌の影響を強く受けていると言われています。実際、「ふるさと」のもとになったのではないかと言われている讃美歌もあります。**

**恐らく岡野貞一は「ふるさと」の歌詞を見ながら、岡野の地上での生まれ故郷である鳥取のふるさとの光景を思い浮かべると共に、天のふるさとの風景を思い浮かべて曲を付けたのではないかと思います。**

**特に3番の**

**「志を果たして　いつの日にか帰らん　山は青きふるさと　水は清きふるさと」**

**クリスチャンの岡野貞一はこの歌詞をどう思ったでしょう。立身出世をしてふるさとに帰ることができればそれはそれで立派な歩みでしょうが、たとえそうならない歩みであっても、私たちには帰ることができるふるさとがある。志が果たせようが果たせまいが、失敗だらけの人生であろうが、私たちキリスト者にはいつの日にか帰るふるさとがある。それは天のふるさとではないか。この地上の歩みを終えて帰る天のふるさとではないか。その天のふるさとに私たちはいつの日にか帰れるんだ。天のふるさとは地上のふるさとよりももっと山は青く、水は清くて澄んでいるんだろうな。「我らの国籍天に在り」「我らのふるさと天に在り」このフィリピの信徒への手紙の御言葉を思い浮かべて、地上のふるさとへ希望ももちろんですが、それ以上に岡野は天のふるさとへの希望を持って曲を付けたのではないかと思います。**

**「我らの国籍天に在り」「我らのふるさと天に在り」これが私たちイエス・キリストを救い主と信じる者の持つ希望です。私たちにはこの地上での歩みを終えて帰るふるさとがあるのです。もちろんこの地上のふるさとも私たちの記憶の中では緑豊かなあたたかな風景の所ですが、それ以上に天のふるさとは山は青く、水は清くて澄んで綺麗で、そこにはもは悲しみも苦しみもないところです。先に天のふるさとに帰られた方々と再会をし、共に神様を礼拝し、讃美を死、祈りをささげるのです。先に召された方々はその天のふるさとで私たちを待っていてくださるのです。私たちはこの希望があるからこそこの地上の歩みを続けることができるのです。**

**それは反対に、もし天のふるさとへの望みがなかったとしたら、19節でパウロが言うように「彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。」という歩みをしてしまうでしょう。腹を神とする＝自分自身を神として、恥ずべきものを誇りとし、この世の事しか考えずに滅びへと歩んでいくのです。いかにこの世で成功して富と名声と名誉を集め、自分の地位を誇り、自分さえよければそれでいい。さらには今さえよければそれでいいというような刹那的な歩みをするのです。そして、やがてこの地上での命を終える時にいったいどこにいくのかわからないのです。死んだらどうなるのか。死を恐れて死を忌み嫌い、死を遠ざけて考えないように考えないようにするのです。でもそこに本当の喜びがあるでしょうか。何か空しいものを感じるのです。**

**「死んだら終わり」私たちはそうは考えません。死の先になお希望がある。天のふるさとに帰る希望があるのです。私たちの歩みは天のふるさとに帰る希望を持つと共に、パウロが20節で「そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」と語るように、天のふるさとからイエス様が再び来て下さるのを待ち望む歩みでもあるのです。**

**いつの日にか天のふるさとに帰ることができる希望とそこからイエス様が再び来て下さるのを待ち望む希望、その希望を持って私たちは信仰の旅路を歩んでいきましょう。**